

誰でも歩ける

中山道

下巻

六十九次

伏見宿
守山宿編



Hitono Iunari

日殿言成

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

誰でも歩ける

中山道

下巻

六十九次

伏見宿
守山宿編

Hitono Iunari

日殿言成

誰でも歩ける



中山道六十九次

下卷

Hitono Inari

日殿 言成

はじめに

中山道を歩く旅も少しずつ、終わりに近づいてきました。

私が筆者と中山道を歩くことを決めてから、最初に訪れたのは、岐阜県の十三峠でした。そこは石畳や、たくさんの道祖神、神社仏閣と起伏に富んだ自然豊かな中山道が残されていて、とても素晴らしい所で、それは私たちにとっても幸先の良いスタートを切ることができたのです。

都会に近い中山道でも、旧跡の説明版や石碑など、いろいろな手を尽くしてくれているし、それはそれでありがたいことと心から思います。残念ながら東京近辺に残る旧道は、ほとんども舗装された道となっているのが現状です。

あの土の道の柔らかさは、さながらフカフカの絨毯のようで気持ちが良いものです。

人工透析を受けていた筆者が中山道を制覇できたのも、そういった自然の残る道を歩くことによって癒され、時には励まされたからではないかと、今さらながらに感じています。私自身も筆者と「歩く旅」によって、日常のつらいことや溜まったストレスを解消できましたし、一生の大切な宝物になりました。そして、今まで知らずに過ごしていた町が身近になり、名所・旧跡やその町の名物などのたくさんの知識や、歩く道すがら出会った人々との思い出もできたうえに、身体も健康になったのです。

読者の皆さまも、実際に中山道を歩いてみませんか？ ぜひお勧めしたいと思います。

平成十八年初夏

長井 みゆき



挿絵：横田広子

本書の使い方について

この本は、五街道のひとつである中山道の宿場と関連する名所旧跡を西暦二〇〇〇年から歩き始め、書きためた文章と地図を一つの形にしたものです。中山道を訪れてみたいと思っっている方、または、これから歩こうと計画を立てている方々の参考になれば幸いです。

本書は、五街道の起点である「日本橋」を出発点として、草津宿手前の所まで書かれております。京都方面から日本橋に向かう方には、読みにくいところもあるかもしれませんが、ご了承くださいませ。

以前に出版した『誰でも歩ける東海道五十三次』（文芸社）は、とてもボリュームがあり、持ち歩きができるような本ではありませんでしたが、今回は、三巻に分けて出版いたしましたので、旅をする際のお供が可能になりました。

上巻は「日本橋～和田宿」、中巻は「下諏訪宿～御嵩宿」、下巻は「伏見宿～守山宿」までとなっております。草津宿と京都に関しては、『誰でも歩ける東海道五十三次』を参考にさせていただきたいと、著者が守山宿で筆をおいてしまいました。

手書きの地図は自分たちの足で歩き、メモを取りながら書きためていったものを形にしました。本という形になるまで、六年もたつてしまいましたので、旧跡、名所の読み違いや、道の変わってしまった場所も多々あると思いますが、その辺はご了承ください。

この本を参考に歩かれる方々のお力になれたら、著者も喜ぶことと思います。

〈地図の記号一覧表〉

	本陣跡		郵便局		国道標識		松並木
	古い民家		銭湯・温泉		国道標識		杉並木
	民家 1		バス停		県道標識		役所
	民家 2		ストア		工場		県庁
	ビル		公園		一里塚跡不明		その他
	その他の家		休憩所		一里塚跡現存		遺跡
	ガソリンスタンド		踏切		杉		滝
	コンビニ		地下鉄		松		果樹園
	病院		駐車場		その他の木		梅
	喫茶店		宿泊		桜		名所・史跡
	飲食店		常夜灯		道路案内		教会
	学校		標石・石碑		道路案内		カエデ
	交番		//・kmポスト		道路案内		道の駅
	消防署・団		高札		道路案内		道路標識
	トイレ		説明板		道路案内		//
	銀行		信号		中山道碑		//
	農協		夢舞台道標		発電所		//
	寺		句碑・歌碑		見附跡		地下道
	神社		道祖神・地蔵		城址		送電線
	幼稚園		石碑・道祖神		熊鈴		木

〈地図の見方〉

地図はすべて日本橋を起点に京都方面へ向かうように書かれたものです。下が日本橋、上が京都方面として描かれております。

65	高宮宿 たかみやじゆく	137
64	鳥居本宿 とりいもんどじゆく	125
63	番場宿 ばんばじゆく	118
62	醒井宿 さめがゝじゆく	111
61	柏原宿 かしわばらじゆく	102
60	今須宿 いますじゆく	96
59	関ヶ原宿 せきがはらじゆく	87
58	垂井宿 たるいじゆく	76
57	赤坂宿 あかさかじゆく	66
56	美江寺宿 みえじじゆく	57
55	河渡宿 かうとじゆく	53
54	加納宿 かのうじゆく	39
53	鵜沼宿 うぬまじゆく	28
52	太田宿 おおたじゆく	17
51	伏見宿 ふしみじゆく	11
	本書の使い方について	6
	はじめに	5



68	守山宿 ちりやまじゆく	178
67	武佐宿 むさじゆく	161
66	愛知川宿 えちがわじゆく	149
	宿場里程表	186
	おわりに	187
	参考文献・資料	189



名鉄「八百津線」を横切って国道の坂を上り切ると「伏見宿」に到着だ。

(残念ながら宿手前を走っていた八百津線は乗降客減少により、平成一三年九月で廃止された)

宿場の規模

ここは交通量の多い国道沿いに面しているせいか、当時の雰囲気を残す建物などはほとんど残っていない。しかし左手公民館前に「本陣跡」碑と「領界石」碑が立てられている。伏見宿の成立は元禄七年(一六九四)頃といわれ、それまであった土田宿が廃止されて作られたという。伏見宿は天保一四年の記録によると本陣一、脇本陣一、旅籠屋は二九軒あった。

これをみれば「商業地」としてかなり賑わ

っていたのがわかるが、ここには伏見宿北を流れる木曾川沿いに「新村湊」と呼ばれる「船着き場」があったからで、商業地として重要な物資輸送の拠点になっていたからだ。新村湊から船に乗ると「名古屋、桑名」へは二日、三日で出られたから、とても重宝がられ多くの物資が運ばれていたのだ。

しかし、その川船も明治に入って交通機関が発達するとしだいに衰退し、役割は終わってしまったという。

なお、公民館前にある本陣跡碑だが、本当の本陣はこの向かい側にあったそうで、適当な場所が確保できないので今はここにあるのだという。

本陣跡碑のある公民館前を過ぎると、左「明智駅」と出ているように、左に下って行くと明智駅に出られるのだが、昔はこの駅も「伏見口」と呼ばれていた。

左手には珍しい掛け軸の店があって「伏見」信号交差点に出るが、ここには道標が残っている。

「右御嵩」「左兼山八百津」と彫られているが、これは金山方面の道を示していたもので、



道標
「右御嵩」「左兼山八百津」



公民館前にある本陣跡碑。



公民館前の領界石には「是より東尾州領」と刻まれている。

金山には金山城と呼ばれていた「斎藤道三」の築いた城があったのだ。

元旅籠屋「三吉屋」

交差点を越えると左手に見事な「卯建」のある古い家が残っているが、ここは元旅籠屋で「三吉屋」と呼ばれていた。

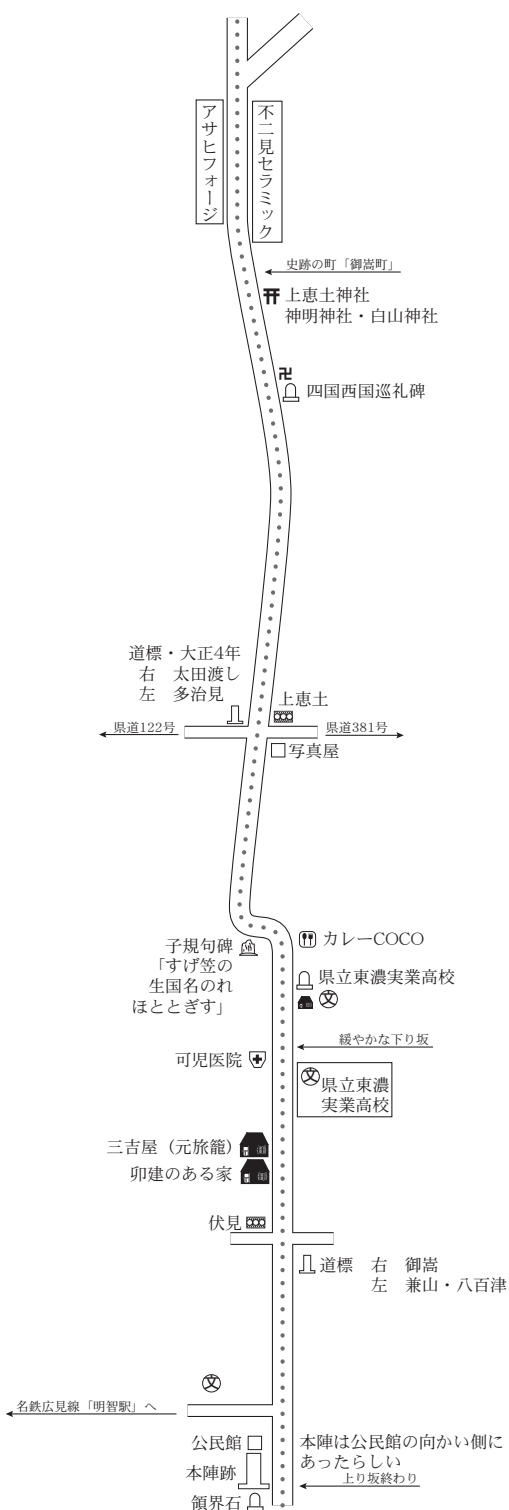
当時は「生薬屋」と「旅籠屋」を営んでいたという。この辺りでは「日野商人」の活動が活発だったからで、ここには「感応丸」と書かれた看板なども残っていたという。

ちなみに日野商人とは有名な「近江商人」

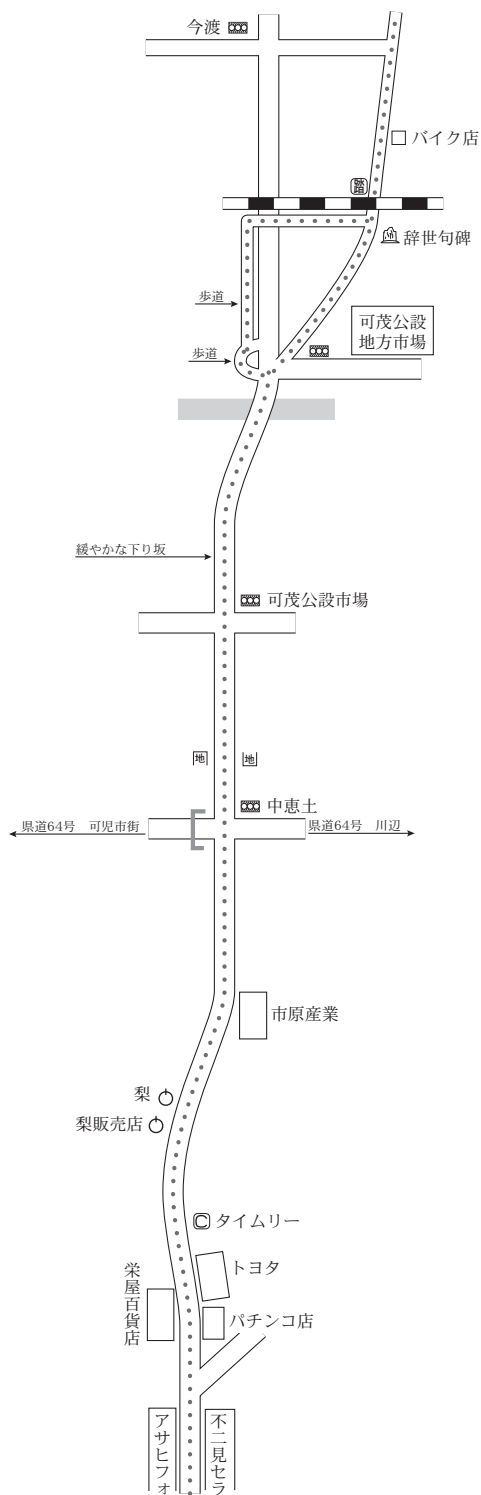
の一つで、近江の日野出身（現在の滋賀県蒲生郡日野町）者をこう呼んでいたのだ。日野商人は主に地元で作られた「日野椀」や「葉」（万能感応丸）、「小間物」などを売り歩いていたという。特に感応丸と呼ばれる薬は街道筋の人気商品になっていたから、買い求める人で賑わったという。

木曾街道六十九次

右手に県立東濃実業高校が見えてくると、



写真中央に見えるのが元旅籠屋。



ここも宿はずれだが、広重が残した「木曾街道六十九次」の伏見についても少し触れておこう。

この絵も伏見と言われなければまったくどこかわからないような絵だから、想像で描かれたのは間違いないだろう。

ただし「大杉」が中央に描かれ、周りには色々な人物が配置されている。

伏見宿手前の御嵩で有名だった蟹薬師の「瞽女」^{ごせ}達や、「薬箱」を背負った医者のような人物も描かれているから、これらを配置したのは色々な情報を広重が知っていた証拠か

もしれない。

宿を出ると先は緩く下って国道らしく賑やかな場所に出してしまうが、左手に見られるのは正岡子規の句碑で、これには「すげ笠の生国名のれ ほととぎす」と刻まれている。

先は「上恵土」交差点で、ここには大正四年の道標が残っている。

「右太田渡し」「左多治見」と彫られていて、大正時代にはまだ太田の渡しが行われていたのもわかってくる。

なお、ここからの国道二一号线は単調な場



同じ道標を反対からのもの。



大正4年の道標。

所が変わってしまい、特に見るべき物もほとんどない。

右手に見える神社は「上恵土神社」で、ここには「白山神社」や「神明神社」も合祀されているようだ。また境内には車の人にわかるように「ここから史跡の町御嵩」と書かれた看板も置かれている。

右手に「不二セラミック」、左に「アサヒフオージ」の工場が見えるとかかなり広い道路に変わってしまうが、この付近では「梨」を売っている店が所々に見られるから、この名産品になっているのかもしれない。

なお、当時この付近は「前波新田」と呼ばれていて、近くには一里塚もあったようだ。現在は開発が進み広い道路で何も見当たらないが、ここでは「前波新田の一里塚」としておきたい。

広い国道を歩くと「中恵土」交差点に出るが、ちょうど左手は可見市街で、右は川辺方面に続いている。

なお、先は緩く下っていて、右手に「可茂公設地方卸売市場」が見られるが、ここは可見市の可と美濃加茂市の茂をとってこのよう

に呼ばれているのだ。

すぐ先にある「用水路」を越えることになるが、この歩道部分は丸くなっている面白い道路だ。

そんな用水路を渡って行くと国道正面に「広見線」の高架が国道を横切っているが、ここで旧中山道は国道右手に入るから間違えないようにしたい。

国道と違って旧道入口は踏切になっていて、手前には「辞世の句碑群」が見られる。

踏切を渡るとすぐ右手はバイク店で、現在はこの付近から「今渡」と呼ばれているが、この付近が今渡と呼ばれるようになったのは明治七年頃からだという（野市場村と金屋村が合わさって今渡となった）。

太田の渡し

しばらく歩くと「住吉」交差点の先が、太田の渡しを控えて賑わった江戸時代の「今渡立場」だ。

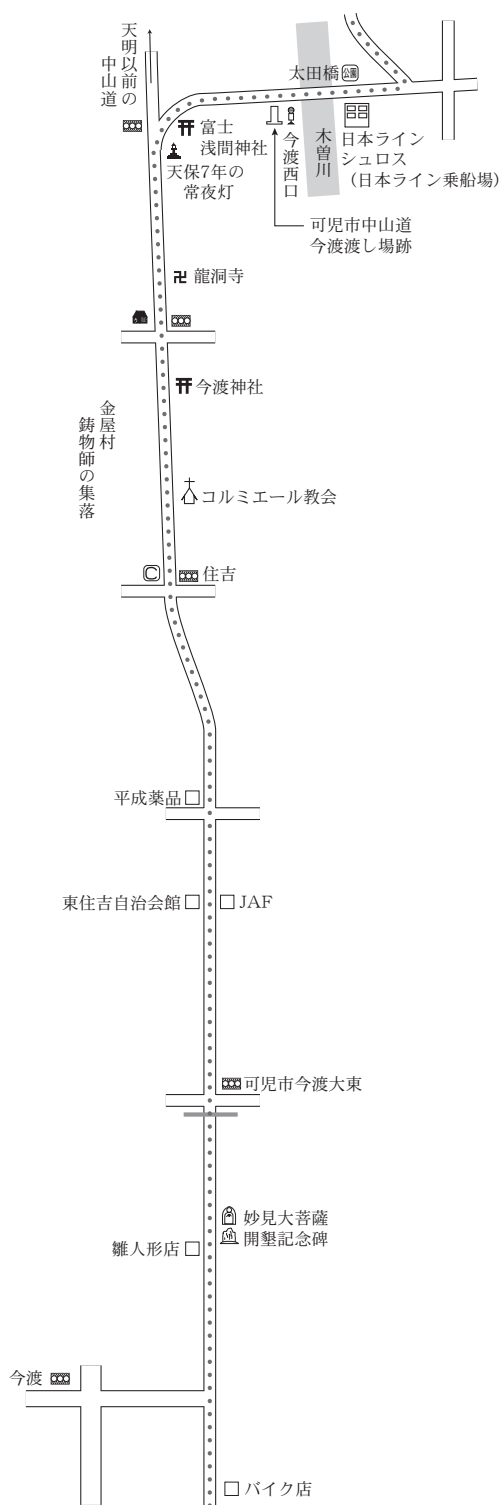
右手には「今渡神社」入口があって、交差点を越えた付近にはまだ古い家も残っているが、当時の木曾川（太田川）は急流で知られ、しかも平時でもかなりの「深さ」があったか



今渡の渡し跡場と書かれている。



上恵土神社



ら徒歩渡しはできなかつたのだ。そこでここは急流を渡し船で越えていたわけだ。

当時、太田の渡しは「中山道の三大難所」にも数えられ、「木曾のかけはし、太田で渡し、碓氷峠がなぐばよい」と宣伝され、中山道きつての難所でも有名だった。

右手にある「龍洞寺」を越えると「富士浅間神社」入口があって道が二手に分れているが、左手の道は「天明以前」の中山道で、当初は「土田村」付近から対岸にある「祐泉寺」裏手付近に渡っていたという。ところが、そ

の後、現在の「太田橋」から一〇〇メートルほど下流に流れが変わったという。

今も河原には「今渡の渡し場跡」が残っているように、ここから対岸にあった「川合の渡し場」に出ていたのだ。

なお、現在は国道の「太田橋」を渡って対岸に出るわけだが、この橋は車専用になっていて歩道部分がないから歩く人は十分に注意されたい。



渡し場跡の説明板。

日本ライン

右手を見ると「日本ライン」の船乗り場があつて、左手には「化石森公園」も作られている。

日本ラインとは、その景観が「ドイツのライン河」に似ていたから命名されている。ここから木曾川沿いの一三キロほどを一時間余りで下る「船下り」として全国的に有名だが、この付近を流れる木曾川は変化が激しく、「花崗岩質」の峡谷が削られ、岩が所々で「奇岩や怪石」となつて見られるのだ。

明治二七年、「日本風景論」を著した地理学者の「志賀重昂」が大正二年ドイツのライン河に似ていると命名した。

河原にある公園下には当時の渡し場跡が二カ所残つていて、手前は明治から昭和にかけての渡し場跡で、奥が江戸時代の船着き場跡だ。江戸時代はだいたいこの付近に着いていたのだ。

土田の一里塚

渡しを無事終えた人々は土手沿いを歩いて太田宿に入っていたが、当時ここには「一里塚」もあつたようだ。しかし、ここの一里塚

は時代ごとに移動していて、最初は「土田」の一里塚（天明以前の渡し場付近、現在渡公民館の東に一里塚跡碑が立てられている）と呼ばれていた。

その後、対岸の「下古井」地内に移つたと町の古老が話していたという話も伝わっているが、こちらの正確な場所はわからない。

とにかく渡し場を挟んで古くは手前にあり、後に移動したと見ていいのではないだろうか。

ここでは土田（下古井）一里塚とし、九八番目にしておきたい。



木曾川の河川敷。

52

おおたじゆく
太田宿次は鵜沼宿
2里
(7.8キロ)

江戸後期には今渡の太田橋下流二〇〇メートルの弘法堂から対岸の「下古井村」へ渡っていた。平時の川幅はおよそ一五五メートルで、河原を含むとおよそ二五〇メートルだった。当時の渡し船は全長一四メートル弱、幅一・五メートルの「馬船」四艘で人馬や荷物を運んだという。川が増水して馬船が使えないと細長い「鵜飼船」五艘が公用船に用意されていた。また、他に貴賓のための「御馳走船」が一艘用意されていたという。

宿場の規模

天保一四年の記録によればこの宿間は東西六町一四間で、本陣一、脇本陣一、旅籠屋は二〇軒あった。当時の宿場は上町、中町、下町に分かれ、中心は脇本陣、本陣のあった中町付近だった。

なお、現在の太田は「美濃加茂市」の中心都市として発展し、江戸時代は近くの「兼山、犬山」などに商圏を奪われ、今ほどの賑わいではなかったという。中山道三大難所の一つとして交通の要衝ではあったが、宿場の規模を含めてわりと平凡な宿場だったと言ってい

旧道風景

当時の人々は渡しを無事渡り終えると、木曾川（太田川）土手を歩いて宿場に入っていたから、今もここは土手を歩く事になる。土手に上がってしばらく歩くと右手下に「水神」や「御嶽山」と刻まれた石碑群が見えてくるから、ここで土手を降りて右手の旧道に入ることになる。

旧道に出た所は「元町」と呼ばれ、右手には古い「鈴木屋」の屋号を持つ家も見えてくるが、ここは元旅籠屋だったという。

また、旧道沿いの家では常夜灯風の看板が置かれている家もあり、これには昔の屋号を掲げている店もあるようだ。

しばらく歩くと左に「太田稲荷」があつて、隣に見えてくるのが「祐泉寺」だ。ここには



立派な卯建がある脇本陣。



太田宿杵形道の風景。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

日殿 言成 (ひとの いいなり)

日殿言成はペンネーム。

昭和26年東京は麻布（現在は六本木）の生まれ。

大学卒業後、某ファミリーレストランの店長などを務める。

その後、腎臓病で入院。平成2年から人工透析を始める。

平成17年5月永眠。

著書に『誰でも歩ける東海道五十三次』（文芸社）がある。

誰でも歩ける中山道六十九次 下巻 伏見宿～守山宿編

2006年9月15日 電子出版発行

著 者 日殿 言成

発 行 者 瓜谷 網延

発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Hiroko Yokota 2006 Corded in Japan

ISBN4-286-01567-X

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。）

新 06.08.31 CAPS